國學院大學学術情報リポジトリ

宗教文化教育と意識されない価値判断：認知科学等の視点を参照して

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 井上, 順孝, Inoue, Nobutaka
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000279

宗教文化教育と意識されない価値判断

―認知科学等の視点を参照して―

井上順孝

はじめに

人間は生物であると同時に社会的存在であり、文化的存在である。したがって物事を判断する際に作動している価値観や個々人の認知フレームといったものには、遺伝子的な傾向に加え、育った環境によって形成された要素が大きく影響している。ある人間の宗教的価値観や宗教的行動、倫理観、道徳観といったことを分析しようとする際も、このことは常に念頭に置いておかなければならない。だが、実際に、宗教が人間や人間社会に及ぼしている影響や機能というものを分析する際に、この点は具体的にどのように考慮されているであろうか。

宗教についての議論がなされる場合、宗教の教えや儀礼、修行、信仰実践など、その宗教が信者に課している事柄に主たる注目が置かれてきた。宗教教育という宗教と教育が交錯する領域に関心を抱く研究においても、こうした傾向は同様である。しかしながら、最近の認知科学や脳科学等は、無意識的になされる価値判断や行動形態に関して新しい知見をもたらしている。その一つが人間が陥りやすい認知バイアスについての研究である。またミーム学（ミーム論）の提起以降さかんに議論さ

れるようになった、遺伝子といわば文化的遺伝子が複雑に絡み合って人間の意識や行動に影響を及ぼすという観点からの議論も、今後の人間研究にとって無視できない指摘を含んでいる。これらは宗教研究にとっても非常に重要な見解と考えるが、宗教に関わる文化的社会的現象を分析する際に、それを考慮する研究は、日本ではまだそれほど多くない。

本稿で扱う宗教教育についても、そうした研究が生み出している知見への考慮は現段階ではきわめて限定的である。この認知科学系の研究における最近の議論を参照していくことは、宗教教育の難しさがどこにあるかについての考察においては外すことができないと考えるに至った。

以下では、まず國學院大學日本文化研究所における宗教教育プロジェクトでスタートした宗教教育についての研究と、その結果提起された宗教文化教育という新しいカテゴリーの特徴に触れる。そして宗教教育とくに宗教文化教育を深める上で考慮していくべき、人間が無意識的に形成している認知フレームをめぐる問題に焦点を当てる。その際、主に脳科学の発達と呼応するかのような認知科学系の研究における議論を参照する。これによって、従来の宗教教育につきまとってきた価値判断に関わる問題についても、新しい展望を得ようとするものである。

一、宗教文化教育への過程

宗教文化教育という新しいカテゴリーがどのような経緯で提起され、具体的な教育方法として提示されるようになったかといったことについては、すでにいくつかの論考を行った[1]。ここでは本稿での議論に直接かかわる点のみを概略示すにとどめたい。

日本文化研究所における宗教教育プロジェクトは一九九〇年度にスタートし、二〇〇一年度まで十二年にわたって実施された。最初三年間の予定でスタートしたプロジェクトであるが、収集したデータの整理に非常な時間を要したことと、日本の宗教教育が抱えている問題を根底から考えるには国際比較が欠かせないと感じられたことで、結果的に長期にわたるプロジェクトとなった。

全国の宗教系の学校についての基礎データの収集、日本と韓国と合わせて五〇校ほどの宗教系の学校での参与観察と面談調査、一九九五年から二〇〇一年まで毎年実施した数千人規模の全国の大学生へのアンケート調査などから、さまざまな宗教教育の課題が浮き彫りとなった[2]。プロジェクト終了後も、プロジェ

クト実施中に構築された研究の輪をさらに広げ、より実践的な立場で取り組むことを継続した。そして戦後の教育基本法の枠組み、そして近代日本の宗教と教育の関わり、さらにグローバル化が進行する世界における要請などを勘案して新たに提起されたのが、宗教文化教育という新しいタイプの宗教教育であった。

つまり宗教文化教育という発想は、この十二年にわたるプロジェクトを踏まえ、国際的な観点からの宗教教育の現状を分析する中に二〇〇〇年代に生まれたものである。その具体化をめぐる議論は、日本文化研究所のプロジェクトを中心とするものから、研究の組織が複数の大学を拠点とするものとなった。関わった研究者の間で調査や議論を重ねるうちに、しだいに具体的な教育方法が構築されていった。科研費を得た上で二つのかなり規模の大きい共同研究が継続的に実施された[3]。その結果、日本宗教学会、「宗教と社会」学会という二つの全国学会と連携する形で、二〇一一年一月に宗教文化教育推進センター（CERC）が設立された[4]。宗教文化士という制度がスタートしたことによって、宗教文化教育が現実的な教育法として展開することになった。

センターではまず大学教育における宗教文化教育を推進するために、各種のテキストが作成され、またオンラインで参考文献、世界遺産と宗教、映画と宗教、博物館と宗教といったテーマでのデータベース蓄積が開始された。これは日本文化研究所のプロジェクトと合同でなされたものであるから、プロジェクトの成果でもある。

こうした具体的な研究が遂行される過程で、宗教教育が以前から抱えていた問題の一部は新しい展望を得たが、他方で宗教教育がもともと有している困難さがすべて解消されたわけではない。この困難さの中には価値観を含む事柄を教育で扱う際に避けがたい問題が含まれる。しかし認知科学に関わりの深い領域から提起された概念やフレームは、その難しい問題に、新しい議論の道筋をつける可能性がある。そこでは、従来の宗教教育であまり議論されてこなかった視点もある。その点を検討していきたい。

宗教文化教育は従来の宗教教育のうち、とりわけ宗教情操教育についての議論の対立の原因と、それを超克することを一つの目的にしていた。戦後まもなく宗教教育の問題に取り組んだ宗教学者の一人が岸本英夫である。岸本は宗教教育に宗教知識教育、宗教情操教育、そして宗派教育に近いものという三つの区分を設けている[5]。宗教教育を宗教知識教育、宗教情操教育、

宗派教育という三つのサブカテゴリーを設けるやり方は、以後の宗教教育に関する議論では一般的となっている。[6] この区分に基づくと、戦後の憲法や法律、教育基本法のもとでは、宗派教育は宗教系学校に限り、宗教知識教育は公立学校でも行えるという点は、疑義なく受け入れられてきた。しかし宗教情操教育が公立学校で可能かどうかという点に関しては、肯定的否定的の相反する意見があり、長く議論が続いている。

対立する議論が収束しない理由は、少なくとも二つある。一つは戦前の日本の宗教教育が直面した問題点に関わり、もう一つは公立学校で宗教について触れる場合の境界線に関係していた。なかなか決着をみなかったのは、この二つの理由がからまっている。まず最初の点に関して、根底に国家が宗教情操を通して、価値をめぐる問題に戦前的な影響を行使することへの警戒があった。二番目に関しては、宗教的情操なるものが、特定の宗教から切り離して存在するとする前提への疑問があった。政治が宗教に関与することへの警戒の強弱、そして宗教史・宗教現象への理解の差といってもいい。

この問題は解決への方向には向かわず、むしろ対立は強まる方向にあった。むろん、宗教系の学校では宗教情操教育も自由であったから、宗教情操教育は宗教系学校に委ね、公立学校等では宗教情操教育には踏み込まないというのが現実的な解決法であり、実際そのようになっていた。従って、公立の学校の教師は、宗教の歴史的展開や中心的概念の説明は行っても、たとえば現代の社会で展開している宗教問題の背景などには踏み込まないという傾向がはっきりしていた。[7]

宗教情操教育をめぐる議論が進展しないときに、突如として起こったのが一九九五年三月二〇日のオウム真理教による地下鉄サリン事件である。前年の六月二七日に起こった松本サリン事件もオウム真理教の信者によるものであることが判明し、宗教教育をめぐる議論はにわかに新しい局面を迎えた。それは「カルト問題」への対処としての宗教教育という視点の浮上である。宗教教育が不十分なために若者がカルトに入るのだというような意見も出された。そのような単純な話でないことは、従来から宗教教育について論じてきた人には感じられたものの、宗教教育がカルト問題にどう関われるかという視点は従来にはなかったものである。

他方、現代日本における宗教教育の機能について考察するなら、グローバル化への対応は、明らかに非常に重要な課題となっていた。[8] グローバル化の指標を何に置くかで、戦後日本のグローバル化の進行がいつ本格化したかは異なるが、人の移動や交流、

すなわち外国人留学生や外国人労働者の増加、逆に国外に向かう日本人、国際結婚の増加といったことに着目するなら、一九八〇年代がはっきりとしたグローバル化への傾向を見せ始めた時期と考えられる。

グローバル化が進行すれば、多様な宗教的背景をもった人たちと日常的に接する機会が増える。それまで国外からの宗教といえば、大半がキリスト教各派であったが、イスラム教、上座仏教、ヒンドゥー教、ジャイナ教、スィク教、ユダヤ教など、それまで日本人があまり日常的に接する機会のなかった宗教を信仰する人たちも身近に見受けるようになる。多様な宗教的背景をもった人々が地域社会の住民とか職場の同僚とかになる。今まではあまりなじみのなかった宗教文化への理解は、観念的な問題でなく、現実な問題として立ち現れ始めた。

二、宗教文化の比較の際の暗黙の前提

こうした経緯があるゆえに、宗教文化教育の基本には自国の宗教文化を理解することと、外国の宗教文化を理解することが、ともに重要な目的として掲げられることとなった。また「宗教」について教えるというより「宗教文化」について教えるという点を強調することで、信仰そのものより、信仰によって生じる生活習慣や行動の特徴、儀礼や教えの特徴ということに理解を深めることが主眼であることを明示した。それが教育の現場で宗教、とくに現代社会における宗教の問題を取り上げる際に抱かれがちであった、宗教の問題は扱いづらいというイメージを、かなり和らげてもいると考えられる。(9)

宗教文化教育は観念的な宗教教育論ではないから、現代日本の宗教文化を扱う際にも、近代日本の宗教史の展開を踏まえてなされなければならない。日本の宗教文化を扱うときには、当然主たる対象とする宗教も、神道や修験道のように、他の国にはないような宗教が含まれる。またキリスト教、仏教、イスラム教といった世界宗教と呼ばれるような宗教の日本における展開は、同じ宗教でも日本と他の国とでは異なった展開をしていることに注意を促す必要がある。

どの国でも独自の宗教史があり、宗教分布があり、また社会で重視される宗教の側面も異なる。たとえば同じヨーロッパでもイギリス、フランス、ドイツはそれぞれ異なったタイプの宗教教育をしているが、それぞれの国の宗教史の違いを考えれば、それも当然である。

隣国の韓国の宗教史の展開には日本と似た部分があるが、現

代の宗教分布はかなり異なる。歴史的な観点からはともに中国宗教から大きな影響を受けているが、戦後の宗教展開は大きく異なっており、韓国ではキリスト教信者の人口比は日本に比べてはるかに高くなり、カトリック（天主教）、プロテスタント（改新教）合わせて三割ほどになっている。

中国仏教、儒教、道教などを周囲の国に広げた中国自体は、社会主義政権の誕生によって、宗教の扱いは日本や韓国などとも大きく異なる。知識としては五つの宗教（カトリック、プロテスタント、仏教、イスラム教、道教）を教えるが、宗教が政治その他に影響を及ぼすことには強い警戒がある。またウィグル自治区におけるイスラム教の扱い、またチベット自治区におけるチベット仏教の扱いなど、政府が非常に神経をとがらせている宗教問題がある。それゆえ現代中国における宗教教育は知識教育のみであっても、内容的にきわめて制約の多いものになっている。

歴史的にみれば大乗仏教、儒教、道教などの影響が大きかった東アジアの国々を比較してさえ、現代の宗教状況、宗教を取り囲む政治状況といったものは大きく異なっている。宗教教育をグローバルな視点から考えようとした場合には、この条件の違いは第一に考慮しなければならない。

さらにイスラム圏となれば、事情は大きく異なる。政教一致があるべき姿と考える国々においては、公立学校で礼拝の作法を教えるのはむしろ義務となっている。このように、各国ごとに、宗教が置かれた社会的位置は大きく異なることを考えるなら、日本において宗教文化教育の教材を作成するにあたっても、それは日本という環境の中で生まれたものであるということを明確に意識しなくてはならない。そしてそれを他の国において議論しようとすれば、それぞれの国における環境の違いについて考慮していかなければならない。

しかしこうした国ごとの宗教状況、さらに宗教を包む環境の違いということは、従来から指摘されていた。この点への考慮の重要性とは別の角度からの問題に目を転じたい。それは宗教のように各人の持つ価値観に深く関わり、そしてその評価が各人の認知フレームによって大きく異なる現象を扱うときの根本的な問題である。無意識的になされている価値づけ、評価に対する注意の問題と言ってもいい。

その場合、宗教ごとの基礎知識を深めるのとは異なった視点が必要になってくる。人間の認知のあり方、それが何に影響を受けているか、認知にはどのようなバイアスがかかりやすいか、などである。このような視点が重要であると考えられるように

なったのは、最近の脳科学や認知系の学問が実証的方法をとりながら、非常に重要な仮説を提起してきていることが大きい。問われている事柄の中には、自由意志や決定論に関わるものも含まれており、哲学の根本的な問題とされてきたことにも重なるところがある。しかしＤＮＡ研究の進歩やｆＭＲＩなどの技術の開発、そしてコンピュータテクノロジーの発達という今までにはなかった研究環境が、従来とは異なるレベルの議論を生んでいる。そのうちの何が宗教教育の問題に直接的に関わって来るのかを考察しなければならない。

たとえば宗教についてはどの国でも見えない序列、あるいは意識化されていない序列がある。また好ましい宗教、好ましくない宗教のような評価もある。オウム真理教事件が起こったあと、宗教の善悪を見分けるのが宗教学者の務めではないかのような意見が社会の一部に起こったが、これなどは、まさに宗教の善悪に対する判断基準があるはずであるという前提の存在をあらわしている。

また日本社会では、個々の宗教についての見えない序列のようなものが存在する。神社や仏教宗派は長い時間をかけて日本社会に根付いた歴史があるので、最近になって形成されたような新宗教と比べて同じような視点では扱われない。それはメディアの報道姿勢を見ていても歴然としている。宗教行事の紹介は神社仏閣に関係するものが主流であり、新宗教関係のものはまず扱われない。こうした宗教についての社会的評価は宗教教育の際の各宗教の扱い方にも反映されてきた。

この点を各国の宗教についての教科書を比較しながら検証している研究者の一人が藤原聖子である。中立的に見える日本の教科書にも、自覚されない差別・区別が存在することを具体例を出しながら論じている[10]。その指摘は非常に興味深いが、なぜそうしたことがあまり意識されてこなかったのか、そしてその結果としてのいわば偏った見方はどうして生じたのかの考察を行う場合に、認知系の学問の参照は非常に有益である。それはたんに知識不足とか、宗教のことをあまり真剣に考えていないからだというような議論にとどまらないからである。文化的に形成されている意識されづらい認知フレーム、さらにはそうした認知フレームの形成に関わっている遺伝的要素ということにも視点を広げられる。グローバル化が進む時代の宗教教育は、それが陥りやすい偏りに自覚的になるためには、個々人の意志決定がなされる過程において、脳内では何が起こっているかという観点からの議論がきわめて重要になってきていると考える。

三、宗教現象への意識されない認知メカニズム

宗教あるいは宗教文化について教育の場で概略を紹介しようとする場合には、それぞれの宗教について、宗教側が公式的に構築しているような見解を参照することを基本とする。つまり何が基本的な教典であるか、何が自分たちが大事にしている教えであるか、また儀礼や実践はどのようになされなければならないかである。それらは各宗教の神学的・教学的な議論によって提示されている。また慣習的に維持されているものもある。そこでなされている言説の何が適切であり、何が根拠がなさそうに見えるかは、研究者が教団外の資料やデータを参照しながら追究する。

当該宗教についてのいわば暗黙の認知フレームというべきものは、宗教側によって構築されている枠組みに大きく依存することになる。そしてその程度は、世界宗教と呼ばれるもの、歴史的宗教と呼ばれるもの場合は必然的に大きくなる。それゆえ、キリスト教と仏教の違い、キリスト教の中でのカトリック、プロテスタント、オーソドックスの違い、仏教の中での上座仏教と大乗仏教の違いといったことを、宗教文化教育の一環として説明する際にも、それぞれの宗教・宗派の公式的立場を把握しておくことは欠かせない。それを踏まえた上で研究者による調査、分析、観察といったものによって構築された学術的な見解が導かれることになる。

比較宗教学は、世界各地の宗教について、共通する要因や似たような現象があるのか、あるとしたらそれは何かを問う視点を常に有している。他方で、ある宗教に特有のものは何かにも注意を払ってきた。一神教と多神教の違い、戒律の厳しい宗教とそうでない宗教、政治と分かちがたく結びついている宗教と、政教分離を原則とする宗教、儀礼に非常な重きを置く宗教とそうでない宗教など、多くの比較研究は、共通性と独自性をめぐる問題はきわめて複雑であることを示してきている。

宗教文化教育は比較宗教学的な発想、あるいは宗教社会学や宗教人類学などの考えに強い影響を受けているから、宗教間の違いを優劣の視点、進んでいるとか劣っているとかといったような視点からは扱わない。どのような宗教であっても、それは人間の営みという観点からみていき、違いは宗教ごとの目指す理念の違いやそのときどきの社会・文化的環境による違いから生じたとするのが基本である。

とはいえ、すべてが相対主義的に扱われているわけではない。

その典型がカルト問題や宗教テロと呼ばれている出来事の扱いである。密室に連れて行って、人が極度の不安を感じるような話を長時間にわたって続け、それを多額の献金をさせる手段とするような活動、あるいは無差別に人を殺すことを正当化するような教えを、そのまま宗教の一つのあり方として、他と同列に紹介するというようなわけにはいくまい。宗教の理念を名目に無差別テロを行うのもまた宗教的教義の一つの展開であり、共生していくべきであるというような視点に立つことは、少なくとも今の日本の教育現場においては、許容されるものではない。

宗教文化教育においては、宗教がどの方向に進むべきかの議論を目指してはいない。もしそのようなことを行うのであれば、それは宗派教育においてなされるのがふさわしいであろう。けれども、宗教文化教育であっても、どのようなことは避けなければならないかの議論はなされる必要があるということである。

こうした基本的な立場からすれば、基本的方針は明確になる。宗教側が自分たちの教えを最高のものと位置付けたり、儀礼に高い価値があると説明したりしても、そのままには位置づけない。あくまで当事者にとっての価値を紹介するにとどめる。逆に他の宗教に対する低い評価、場合によっては貶めるような言い方があっても、それはその宗教からの評価とするにとどめる。個々の宗教への評価は個々人に委ねられる。しかし明らかに現代世界で受け入れられないような主張や活動がなされていると考えられるような場合には、他と同列には扱わない。

多くの場合、宗教文化教育で行える範囲はおおよそここまでであると考えられる。だが、それで価値判断に関わる事柄が解決されたかというと、そうではない。通常はあまり意識されない評価という問題があり、この点は実は無視できない重要な意味をもっている。通常あまり意識されない評価というのは、たとえば「世界宗教」と表現した段階で生じる効果、神道は「日本の伝統的宗教である」と表現したときに生じる効果を考えると分かりやすい。

世界宗教には民族宗教というしばしば対比的に用いられる概念があるが、比較宗教学的な観点からは、それはどれだけ多くの国や民族に広がったかというのが区分のもっとも重要な点である。しかし世界と民族という言葉の対比構造そのものが、世界宗教の方がより高次な宗教である、という暗黙の評価を生み出す場合があるのも確かである。あるいは伝統的宗教と新宗教という表現は、その社会における存在時間の違いや社会制度との関わりの深さなどを基準にして用いられていると考えられる

が、伝統的な方が正統的であるという考えになりやすい。

用いる言葉によって生じるこうした差異化・差別化は意識されない評価につながるので、細かな注意が必要である。ただ、これが言葉の用い方、概念の適切な理解ということで収まらない面があることに目を向けたい。あまり意識されない評価が、実は人間の認知のあり方に関わっている側面があるとすると、個別の宗教団体や宗教現象に対し無意識のうちに形成されている差別化・差異化がなぜ生じるのかという問は、あらたな様相を見せてくる。宗教についてのより正確な知識を身につけるというだけでは解消できない次元へと足を踏み込むことになるからである。

この意識化されにくい、あるいは意識化がきわめて困難な問題を以下では少し長い時間のスケールで考えてみたい。これは宗教教育固有の問題ではないと言えるからである。最近の認知科学や脳科学に関連する諸研究では、人間の思考や行動形態を理解するにあたって、人類進化の過程で遺伝子に組み込まれたいわばプログラムに注目する。進化心理学、進化生物学など、明確に進化の語を冠した分野はとくにそうである。

宗教文化教育は基本的に各宗教についての価値判断は行わないのは原則としても、価値判断から無縁ではいられない。それゆえ、人間の認知の問題を長い時間のスケールで考えている研究を参照しておくことはきわめて重要と考える。こうした一連の研究はまさに形成途上であるので、多くの仮説が提起され、反駁がなされ、修正されるという状況である。それでもしだいに多くの領域で採り入れられるようになった仮説がある。本稿では試論的な意味もあって、二つの視点に着目し、それが宗教文化教育にどう関わるかを議論する。一つは認知バイアスという観点、もう一つは二重過程モデルなどミーム学以降の人間の認知理解の枠組みである。

四、認知バイアス

まず認知バイアスについて触れる。グローバル化時代の宗教文化教育は教義的なことだけでなく、日常的な行動や感覚の違い、しかも宗教文化に関係しているなどとはあまり意識されないことがらも考慮しなくてはならない。聖書や仏典、あるいはコーランに書いてあることへの基本的理解に加え、日常的にある国のキリスト教信者、仏教信者、あるいはムスリムが無意識的に行っている行動や、暗黙の前提としている価値観、認知のフレームというものが重要になってくる。実際の人びとの生活

の場で認知される宗教文化はたいていがそうした姿を通してであるからである。一般の日本人がコーランの内容を詳しく知らなくても、日常的にさほど問題はないが、どんな食べ物がハラールなのかを知っておいた方がいいような職種は増えている。

その場合、ムスリムは豚肉を忌避するということは、イスラム教を解説した本ならどれにも書いてある。しかし、豚肉を忌避する人たちに対してもつ感覚がどこから生じるかについては、なかなか説明はされない。したがって、豚肉を忌避するムスリムに対し、それを彼らの戒律として認めつつも、おいしい肉を食べられない可哀そうな人たちというような意見を持つ人も出てくる。

人間が持っている認知バイアスは、宗教的価値観が日常的生活においてあらわれている局面において、作動しやすいと考えられるので、価値に関わる問題を論じるときに参照すべき見解である。

心理学、社会心理学、経済学など広い分野で使われるようになった認知バイアスという概念は、人間は「認知的節約者(cognitive miser)」であるという前提に立っている[11]。では、なぜ節約をしなければならないのか。

人間を取り巻く環境が潜在的にもっている情報は膨大である。そのすべてを確認し、どれが重要かを判断し、どういう行動をとることが生命にとって必要なことかといったことを選択するのはきわめて困難である。たとえぼうっとしていても、脳は自分が安全な場所に立っているのか、あるいは座っているのか、呼吸が可能な場所にいるか、危険なものが近寄っていないかなどを、複雑なニューロンのネットワークを使って知覚し認知している。だからこそ読書中にちょっと椅子が傾けばとっさにバランスをとるし、部屋で変なにおいがしたらあたりを見回す。

そうした脳にとって、数学の計算や英語の翻訳や新しい言葉の暗記といった作業は、意識せず行われている恒常的な作業に付け加わったさらに面倒な知覚・認知作業である。自分たちの宗教文化には見られない戒律や宗教実践が、なぜある人々にとってはそれほど重要なのかということを、深く考えるのも、宗教研究の専門家でもない限り、一般には脳に大きな負荷がかかるであろう。とすれば、それほど差し迫っていないなら、できるだけニューロンの働きを節約しようとするのは当然ということになる。

認知の節約に用いる一つが単純化のために用いられているヒューリスティック（heuristic）と称されるものである。これ

は「少ない努力で即座に結論を求める方法」といったように特徴づけられている。短い時間で処理されるので、妥当と呼べる結論に達することができるものの、厳密なプロセスを踏んでいないので、必ずしも最適な判断や意思決定につながるとは限らない。もし最適解を得ようとするなら、（得られるものがある場合だけだが）アルゴリズムと呼ばれる方法などをとらなくてはならない。

ヒューリスティックとしては、代表性ヒューリスティック、アンカーリングのヒューリスティック、利用可能性のヒューリスティックの三つが代表的なものとされている。

このうち代表性ヒューリスティックとは、ある事柄について典型的と思われるものを判断に利用しようとするようなやり方で、典型的な特徴をもつ内容に対する確率を過大に評価しやすくなるものである。これを具体的事例で示したのが「リンダ問題」として知られているものだが、やや長くなるのでここでは説明しない。少し短い例をあげるなら、ある高等学校の窓ガラスを割った犯人が「高校生」か、「暴走族に加わっている高校生」かと二択で聞かれると、「暴走族に加わっている高校生」と答える人が多いというような例である。論理的に言えば、高校生と答えた方が正解の確率は高くなるが、典型的と思っているものに引きずられてしまうということである。

代表性ヒューリスティックを宗教面に応用してみるとこうなる。どこかの国で爆弾テロがあったという報道を聞いて、これは「イスラム過激派」によるものと考えるか、「過激派」によるものと考えるかと問うと、現代日本ではイスラム過激派と答える人が多いかもしれない。イスラム過激派は過激派の一部であり、可能性だけなら過激派と考えた方が正解の確率の高い推測であるが、それより狭い範囲のイスラム過激派を、典型例としてすぐ連想してしまう人が少なからずいるということである。

認知科学を採り入れた人間研究においては、認知バイアスについての議論が幅広くなされている。そこで浮き彫りにされていることの一つは、人間は常に合理的な選択をするわけではないという点である。不合理と分かっていてもそちらを選ぶときもある。行動経済学者のカーネマン（Daniel Kahneman）らのプロスペクト理論が注目されたのも、人間の経済行動がしばしば合理的とは言えない判断に従っていることを、現実の人間の判断に即して示したところにある。

ところが宗教的行為はもともと合理的には説明が難しいものが多いとされてきた。非合理的な観念や行動はむしろ宗教的な観念や行動の特徴とさえ考えられたりする。従って人間が常に

合理的な選択をしないといっても、そのことには宗教研究者はさして驚かない。しかし宗教には合理的でない思考や行動が珍しくないというだけにとどまっていると、実は明確な理由があって一見合理的ではない考え方や行動をすることへの追究がおろそかになりがちである。

認知バイアスを含め、認知系の学問は脳神経科学などの成果も積極的に採り入れ、生物学的根拠を社会的・文化的環境などと関連づけて、人間行動の複雑さに関し、非常にダイナミックな議論を提供するようになっている。宗教研究においても参照すべき議論が多くある。宗教教育も特定の社会的・文化的環境を考慮してなされてきたわけであるから、多様な宗教的伝統の存在とそれに対する評価が関わるテーマでは、認知バイアスをめぐる議論を採り入れていくことは避けがたいと考える。

従来宗教教育はどちらかと言えば、各宗教の教義的側面に中心を置く傾向があった。だが、宗教文化教育は、教義だけでなく日常的行為に関わる理解を重視するので、その宗教の教えだけでなく、その宗教の教えの背景にある当該社会の慣行や価値観、当該文化の中で存在する特定のフレームといったものの影響に目を向けなくてはならない。宗教問題だけでなく、当該社会に生じやすい認知バイアス、そしてどのような社会であるかにかかわらず人間に生じやすい認知バイアスということを考慮することが必要ということである。

認知バイアスに関しては、多くの種類が出されているが、具体例として、確証バイアス（Confirmation bias）について、宗教文化教育にどう関係するかを検討してみる。確証バイアスは自分がすでに持っている信念や仮説を確認するようなやり方で情報を探し、解釈し、えり好みするような傾向を言う。非常にありふれた現象である。たとえば宗教は人間に必要だと思っている人は、それを補強するようなニュースや論説や意見などを好む。宗教を否定的に見ている人は、それを確信させるような出来事に目がいく。そうした傾向のことである。

確証バイアスの例は宗派教育においてはたやすく見つけることができる。自分たちに関わる宗教については肯定的な評価をするのが通常であるから、その宗教に関わる社会現象、その宗教を扱った文学作品や映画や美術などについては、その宗教を肯定的に評価するようなものを探し、自分たちの価値観の正しさを確認していくという傾向が強くなる。

宗教情操教育が公立学校において可能かどうかが議論になったとき、特定の宗教に関わらない一般的宗教情操なるものがあるかどうかが、一つの焦点になった。そういうものがあると主

張する人たちが出す例が「生命の根源、すなわち聖なるものに対する畏敬の念」であった。これが確証バイアスとして存在するなら、それに合致するような例を見つけることは可能だろう。どの宗教にもそうしたものがあるとして探せばいいのである。だが、このときの「生命」は一体どのようなものを想定しているのであろうか。

生命観は決して諸宗教において同じではない。生命の根源といったとき、それは何を想定しているか。神道の生命論ではアニミズム的な発想があるから山川草木にまで思いが及ぶことがあろう。仏教では殺生が禁じられるというものの、上座仏教で僧侶に肉をお布施として差し出しても戒律に反するわけではない。ジャイナ教では生き物を殺さないが徹底し、小さな虫の生命も奪わないようにする。イスラム教では屠殺の方法を定めているから、動物の命を断つことは禁止されてはいない。

個々の宗教を見ていくと、「畏敬の念をもつべき生命の根源」が具体的には何を指しているのか焦点を定められるとは思えない。一般的な宗教情操があるという主張そのものが、たとえば「すべての宗教は根源において同じである」というような考えを拠り所にした確証バイアスの産物ではないかという見方が出てくる。

宗教文化教育においても、宗教は社会生活において必要なものと前提する研究者がほとんどであると考えられるから、宗教を扱った映画、文学、芸術、美術、その他についても、それを確認する素材を選ぶ傾向が出てくる。そのこと自体を否定しなくてもいいが、そのようなバイアスが生じやすいということを意識しておくことも必要である。

確証バイアスに限らず、多くの認知バイアスは利己的であると指摘されている。それはバイアスが個人や種の存続に都合のいいように形成された可能性があると考えるなら、自然なことである。宗教に関わる現象が認知バイアスの対象になることは当然である。宗教は例外であると前提する根拠はない。

五、ミーム学の影響

人間が生物であり、かつ社会的・文化的存在であるということを、個々の文化現象においてどう斟酌していくか。進化生物学などにおける議論を踏まえて出されている考えとして代表的なものが、ミーム学、二重相続理論（ＤＩＴ）や二重過程理論などである。宗教に関わる議論に適用するには、日本の研究の現状からすれば、いずれも仮説として捉えておくのが妥当かも

しれないが、欧米ではもはや無視できないほどの議論が蓄積されてきている。[12]

これらは人間の社会的文化的行動の考えに対してほぼ似たような把握の仕方をしている。宗教的理念、宗教的行動に即して応用すれば、おおよそ次のような理解の仕方になろう。まず人間の遺伝子に組み込まれた情報には宗教的理念、宗教的行動につながるものが含まれている。これは決して宗教的遺伝子のようなものがあるという考えではない。あくまでいくつかの遺伝子の組み合わせが宗教的な考え方や行動の形成に影響するという捉え方である。発現する遺伝子の組み合わせが異なれば、異なったタイプの宗教が生まれることになる。また模倣を通して得られ脳内に組み込まれたいわば文化的遺伝子のようなものが想定されているが、その中にも、宗教的理念や宗教的行動と呼ばれるものに関わるものがある。遺伝子と文化的遺伝子は独立的に作用するのではなく、互いに影響しあう形で、ある人間の宗教的思考や宗教行動をもたらす。

この一連の考え方に大きな影響を与えたのが英国の生物学者ドーキンス（Clinton Richard Dawkins）のミーム学である。ただしミーム学は、強い支持者がいる一方で否定論者もいる。遺伝子はＤＮＡという情報をコピーする際の確固たる媒介物があるが、ミームは模倣により伝達されていくとされているので何が単位になるのかそこからして議論が出てくる。

認知系の研究では、模倣はミミック、エミュレーションとイミテーションの三つに分けられることがある。[13] ドーキンス以後ミームはいずれにも関わるような議論にもなってきているので、話が複雑になるのは避けられない。それでもミーム論は天動説と地動説の違いに比されるくらい、人間観の大きな発想の転換がある。多くの弱点をもった仮説であるにもかかわらず、強い支持者がいるのも、そうした根本的人間観に関わる着眼があったのが一因と考えられる。

ドーキンスは文化的遺伝子を遺伝子（gene）をもじりながらミーム（meme）と名付けたと言っている。模倣によって複製されていくミームという概念が提起されたのは、一九七六年に刊行された*The Selfish Gene*という本においてである。同書は一九八〇年に『生物＝生存機械論――利己主義と利他主義の生物学』というタイトルで邦訳が出たが、日本で広く話題になったのは、同書が一九九二年に『利己的な遺伝子』というタイトルとして刊行されてからである。タイトルの衝撃もあったが、その間に日本でも遺伝子に関わる議論が人文・社会科学にもかなり広がってきたことも一因ではないかと考えている。ドーキ

ンスはユニバーサル・ダーウィニズムの立場、つまりダーウィニズムを文化、社会現象に適用していく立場に立っている。

ここで提起された視点のもっとも重要なポイントは、人間が遺伝子に操作される面への着眼である。それまで本能というような形で論じられてきたことが、生物学の理論を文化的現象にも広く適用されたことである。本能は食餌行動、性的欲求、他者への攻撃、母性、集団の防御など、人間が生きていく上であらかじめ組み込まれているように思える行動様式に当てはめられた。しかし、文化的行動はその上位にあり、本能をコントロールする役割と力がある。大まかに言ってそのような理解の枠組みが従来は支配的であった。

しかしミーム論は、文化的なものにも進化論は適用され、かつ人間がコントロールできない部分があることを重視する。ミームが生き残りやすい個体を選んでいくというような、従来とは逆転の発想である。端的に言えば、人が思想を選ぶのではなく、思想が人を選ぶというような考え方である。これによって、ある思想が一気に広がるのはなぜか、特定の観念が世代を超えて継承されていくのはなぜかという問いに新しい説明原理がもたらされた。つまりその思想が優れているから広がったのではなく、それが生き残りの戦略にすぐれているので多くの地域に広がったり、長く継承されたりしやすいという説明原理である。

遺伝については遺伝子型と表現型の二面からの捉え方がある。遺伝子型はA（アデニン）、G（グアニン）、C（シトシン）、T（チニン）の四つの塩基の組み合わせに帰される遺伝子そのものへの着目であり、表現型は、結果的に発現した形態への着目である。たとえばその人の髪の色が黒くなったか金髪になったか、茶色になったかなどで区別していくことになる。表現型が同じでも遺伝子型は異なることがある。

ミーム論を強く支持するブラックモア（Susan Blackmore）は、ミームについてこの区分を適用し、遺伝子型に当たるものを、「行動のレシピ」と呼び、表現型に当たるものを「行動そのもの」と呼んでいる[14]。そして伝達されていくのは「行動のレシピ」であるとする。ある音楽の楽譜が伝達されれば、演奏はさまざまになされても、その曲は世代を超えて継承されていく。そのような理解である[15]。

これは宗教にどう適用できるであろうか。キリスト教では「神は創造主である」というのが「行動のレシピ」とみなせる。実際の儀礼や信仰の場ではその教えが多少のバリエーションをもって伝えられても、神を創造主として捉えていく考えや行動

は世代を超え、地域を超えて伝わっていく。

また表現型が同じでも、遺伝子型が異なることがあるという点を宗教に適用すると、神に対する頭を垂れての敬虔な祈りの儀礼として非常に似ていても、行う人たちが一神教の場合もあれば多神教の場合もあるというような例が挙げられよう。異なった「行動のレシピ」であっても似たような「行動そのもの」を生むと解釈できそうなことは、実際の宗教の場面では珍しくない。断食の苦行、瞑想、同じ祈りの言葉を繰り返し唱えるといった行為など、複数の宗教に見られる儀礼、修行、実践法がある。

「行動のレシピ」の模倣については、ある宗教の基本的考えは世代を超えて伝わるという従来の理解とさほど違いはないようにも見える。しかし、ひどく他者に攻撃的で、争いを好むような主張が、文明化された社会でもなぜなくならないのかというような疑問に対しては、腑に落ちやすい説明となる。たとえば自分たちの集団と対立する集団は殺せというような考えは、善悪でいえば悪とされるであろう。しかし、そうしたミームを受け入れた人間がどの時代にも一定数いれば、その考えは現代にまで生き延びることができる。

宗教が平和運動を推進したり、貧しい人々に救いの手を差し伸べたりするような活動を展開する一方で、宗教戦争、あるいは宗教が深く関わった紛争も絶えることはない。現代の宗教紛争が民族紛争に始まったり、政治的利権争いが原因であったりしたとしても、宗教的な理念や宗教組織がもつ影響力が利用されているのは明らかである。このような現象もまた、こうした考えからすると確かに説明しやすくなる。

文化的遺伝子といった考えを、ドーキンスとは少し異なる形で展開させたのが二重相続理論（DIT、dual inheritance theory）である。これは生態学者のボイド（Robert Boyd）とリチャーソン（Peter J. Richerson）によって一九八〇年代に提唱された[16]。ある世代から次の世代への行動パターンの受け渡しは、遺伝的相続と文化的相続の両方を使って行われるが、両者は相互に関係するので、文化的相続のパターンも様々な遺伝的要因（とりわけ学習能力やさまざまな心理的バイアス）によって規定されると考える。生得的、習得的という言葉はよく使われるが、両者の相互関係を議論したと言えばいいだろう。

ボイドらも認知バイアスの観点を導入している。とくに重視するのが、頻度依存バイアス（frequency-dependent bias）である。簡単に言えば当該社会にある一定以上の割合で広まっている思想や行動形態は受け入れられやすいということである。

宗教社会学者のデュルケムは聖なるものの本質を社会とみなしたことで広く知られているが、一つの社会に複数の宗教があるような現代社会における宗教の機能を議論するときには、二重相続論はある面でわかりやすさを持っている。それは革新的な新しい宗教が出てきても、なぜ伝統的とされる宗教が、次の世代においても受け入れられやすいのかというような場合である。

現代日本においては多くの人が神社に参拝し、仏教宗派にも関係する。ともに広く受け入れてきた宗教と言える。その他、カトリックやプロテスタント、そして数多くの新宗教がある。もしある人の両親がそれぞれ異なる宗教に属しており、それらが地域社会で多数派を占める宗教とは異なっていたような場合、その人は成人の過程でどの宗教を選ぶことになるか。こうした場合、たんに複数の宗教があるというだけでなく、ある突出した割合の宗教があるときは、それが選ばれる割合が高くなるという。これが頻度依存バイアスで解釈できることになる。ただし頻度依存バイアスには逆に少数派を選ぶという場合もあって、結局ある宗教の選択の傾向を認知バイアスで説明できるのかどうか、事例に即した議論が必要になる。

ただ、ここでも文化的な行動に遺伝的要因をみていくから、宗教の教えや儀礼などにも、人間がもつ遺伝的要素が絡まるという見方をとる。といっても、やはり宗教的遺伝子のようなものが想定されるわけではない。

六、二重過程理論

二重過程理論（dual process theory）はカナダの生物学者スタノヴィッチ（Keith E.Stanovich）らによって支持されている理論である。スタノヴィッチはドーキンスのミーム論を踏まえている。『心は遺伝子の論理で決まるのか―　二重過程モデルでみるヒトの合理性』[17]という書の中で、彼は二重過程理論に言及している。自動的に作動する認知機構（ＴＡＳＳと呼んでいる）と、分析的システムの二重過程によって人間は動かされているとみなしている。

二重過程理論という発想に属するものは、たとえば、「したい」自分と「すべき」自分、ホットシステムとクールシステム、ヒューリスティック処理と系統的処理、あるいは直観システムと推論システムなどである。いずれもＴＡＳＳと分析的システムという二つの区分に対応する。

スタノヴィッチが示したＴＡＳＳの主要な特性は、迅速で、自動的で、強制的なことである。他方、分析的システムは、論

理的、記号的思考に適した強力なメカニズムであるが、文脈から離れた認知様式であるため演算能力への負担が大きく、維持するのが容易ではないとしている。先に述べた認知的節約ということに関わっている。

彼の議論の注目すべき点は、ＴＡＳＳと分析的システムとの相互関係である。人間の認知のあり方を火星探査機に喩えている。地球から発射された火星探査機は火星上で作業をするにあたって一々地球からの指令を受けるわけにはいかない。地球から火星にいる探査機に指令を送ろうとすると、相対的位置により異なるが光速でも三～五分半かかる。往復ならその倍である。目の前の障害物についての情報を得て、それに対処するのにそんなに時間がかかっては作業にならない。そこで探査機にはいくつかの予想プログラムを組みこんでおき、火星では未知の状況をそのプログラムによって対処するようにしておく。これはＮＡＳＡが実際にとっている方法である。

これは何を比喩しているかというと、探査機が人間であり、探査機に予め組み込まれたプログラムが遺伝子である。そしてスタノヴィッチは、「ヒトは、遺伝子はみずからの利益になるとなればいつなんどきでも乗り物を犠牲にする、という驚愕の事実を認識した最初の乗り物である。」と述べている。つまり人間は、自分の持つ遺伝子が自分の行動にどのような恐るべき仕掛けをもっているかについて認識した初めての生き物ということである。

「遺伝子はみずからの利益になるとなればいつなんどきでも乗り物を犠牲にする」ということが具体的に何を言いたいのかは、自爆テロを考える分かりやすい。あるいは神風特攻隊でもいい。自身を犠牲にすることが民族のため、祖国のためと思うような行為は、民族や祖国の継続を願うというミームの戦略と理解することになる。これを実行した人間は死ぬけれども、これにより民族や祖国のために命をなげうつという遺伝子は模倣されるという考えである。自爆した人が子どもをもたない場合、その人の遺伝子は継承されないが、ミームはその行為の賞賛によって継承されうる。

スタノヴィッチは宗教については、「環境に付随的に生じる偶発的ミームの古典的例である」とみなしている。カトリックやイスラム教などもミーム複合体と位置付ける。宗教は固有の領域をなすとは考えていない。

こうした考えが宗教文化教育の議論のどの部分に関わって来るか。それは世界のさまざまな宗教文化は、一体どのような理由で生き延びてきたのかという考察の際に参照することができ

る。長谷川眞理子は進化生物学の立場から、宗教の存在理由について、群淘汰の機能の可能性を示唆している。[18] だが、二重過程理論では、宗教がその宗教を担う集団の存続にとって常に有利に機能するとは限らないことになる。

宗教に限らず人間の行為全般へのやや悲観的な見解も垣間見られるが、この書でのスタノヴィッチの議論を支えている哲学的立場の一つを、彼はノイラート的試みと呼んでいる。オーストリアの哲学者オットー・ノイラートが示した考えに依拠しているからである。ノイラートが使った、底板の一部が腐った船の修繕という比喩に言及している。船を修繕するのに岸まで持っていく余裕がない。どこが腐っているかも分からない。そのままにしておくと沈没する。そうした中である決断が迫られる。そういう状況を指している。

そこでは最終的に自己修正する力への信頼に言及される。合理性を用いて合理性を評価する「メタ合理性」による試行とでも言うべきものである。ノイラート的試みとは、理性もまた何か遺伝子的なものに操られているかもしれないという危惧を抱きながらも、しかし理性の働きに最終的に「賭ける」というような立場と理解できる。

二重過程理論に依拠すると、人間が限りなくロボットに近く見えてくるが、そのロボットの最後の反逆の拠り所にするのがメタ理性であり、ノイラート的試みということになろう。本書の原著のタイトルが『ロボットの反乱』となっているのは、そう理解される。

これは人間が持っている価値観が、実はすでに用意されたものに操られている可能性への言及と、それから脱却する可能性を論じたものである。宗教文化教育の具体的な方法に直接関係づけることは困難である。そうではなく、宗教文化教育がなぜ必要かを根底から考えるときの、一つの立場として参照すべきものである。世界のさまざまな宗教文化についての理解が多文化共生時代には必要だとしても、そのこと自体が何をもたらすことになるかを吟味する姿勢も備えておかなければならない。

多くの人が自然に受け入れている宗教、社会の大半が受け入れている宗教、さらに社会から警戒されている宗教、それぞれがなぜそうなのかを自省するときにも手がかりになりうる。

宗教文化教育においては、個々の宗教への価値判断は原則的に留保されることを述べたが、それぞれが現代社会に存続していることへの評価自体をすっかり棄て去るわけにはいかない。宗教文化教育も価値に関わる問題からは自由ではありえないからである。あらゆる宗教、あらゆる宗教文化、そしてあらゆる

宗教的信念が、一歩間違えるとどのような落とし穴に入り込みかねないかを考える余地を残しておかなければならない。

むすび

宗教教育、とくに宗教文化教育は、歴史的宗教の姿、そして現在の宗教の活動形態などを学ぶことを通して、人間社会、あるいは他者の理解につなげようとするものである。そのための教材作成は重要な役割を担っている。しかし、教材の作成はたんに多くの資料・データを収集すればいいというものではない。なぜそのテキストを、画像をあるいは映像を、その宗教の理解のための教材として選定するのか、そのことを常に考慮しなければならない。

本稿は宗教文化教育の教材の収集や作成の際に、通常なされるこうした配慮以外に、いつもはさほど意識されないであろう認知バイアスや無意識的な人間の心の動きについての現在の仮説を考慮することの意味について議論した。

むろん、ここで紹介したような、あらゆる人間の考えや行動には、個人の存続と文化的遺伝子の存続という目的がデフォルトとして備わっているというような考えを、教材作成にあたって、常に念頭に置いておくというわけにもいかない。実際には個々の教材の多様さに直面しながら、どの教材がその宗教の理解に役立つかの判断に対して多くの時間が費やされることになるからである。また共同研究によって、個々の研究者が陥りがちな偏りからはある程度逃れることができると前提しているからである。

それでも宗教には非常に多様な実践形態があり、政治、経済、芸能、レジャーなどさまざまな社会現象、文化現象と影響しあっている。宗教文化教育といういくぶん的を絞った宗教教育であっても、交錯する価値観をどう評価するかという問題から自由ではありえない。

ここで扱ったような最近の研究の議論は、すぐさま宗教文化教育のある側面についての判断に使えるというようなものではない。それでも、客観的と思っていても、それが無意識的に何かに思い込まされた結果かもしれないという反省の道を用意しておくことは、宗教を対象とする教育にとっては、やはり欠かせない視点と考える。

註

（1）拙論「宗教文化士制度発足への歩み」（『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報第4号』、國學院大學、二〇一一年、所収、同「教育における宗教情報リテラシー―「宗教文化士」制度発足の背景」（『宗務時報』113、文化庁宗務課、二〇一二年、所収、同「国際的視点からみた宗教文化教育」（『國學院大學研究開発推進機構　日本文化研究所年報第8号』、國學院大學、二〇一五年、所収）を参照。

（2）宗教教育プロジェクト実施中、毎年行われたこのアンケートは、その後後継のプロジェクトと「宗教と社会」学会の学生宗教意識調査プロジェクトとの合同で、五年に二回のペースで二〇一五年まで実施された。合計一二回の調査が行われ、この間に調査した学生の総計は六万六千人余になる。各回の調査は報告書として数中頁の冊子として公刊されたが、二〇一六年度にこれらをすべてまとめた報告書が出された。國學院大學日本文化研究所編『』この内容はすべて日本文化研究所のホームページからＰＤＦファイルとしてダウンロードできる。https://www.kokugakuin.ac.jp/research/oard/ijcc/kenniccgibunkenkankobutsu/p01

（3）科学研究補助金基盤研究Ａ「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」（研究代表者・星野英紀大正大学教授）、科学研究補助金基盤研究Ｂ「宗教文化教育の教材に関する総合研究」（研究代表者・井上順孝）によって、国内外の宗教教育の現状及び教材に関する研究がなされた。

（4）宗教文化教育の教材作成は國學院大學日本文化研究所のプロジェクトの一環として、宗教文化教育推進センター設立後も継続されている。

（5）岸本英夫「宗教教育の基本問題を探る」国際宗教研究所紀要第四号、一九五六年。同論文は井上順孝編『リーディングス　戦後日本の思想水脈6　社会の変容と宗教の諸相』岩波書店、二〇一五年に再録されている。

（6）ジャーナリストの菅原伸郎はこれにカルト対宗教安全教育（カルト安全教育）と宗教寛容教育の二つを加えているが、これはオウム真理教事件以後の宗教教育の課題を重視したものである。しかし、加えられた二つは少しレベルが異なるものである。菅原伸郎『宗教をどう教えるか』朝日新聞社、一九九九年、参照。

（7）中等教育の教員の実例については、国際宗教研究所編『教育のなかの宗教』新書館、一九九八年を参照。

（8）一九九〇年代半ばに日本文化研究所はこの点を重視した国際シンポジウムを行っているが、それは國學院大學日本文化研究所『グローバル化と民族文化』新書館、一九九七年として刊行されている。

（9）前述の学生アンケート調査の結果からこのことが明らかになった。

（10）藤原聖子『教科書の中の宗教』岩波書店、二〇一一年、などを参照。

（11）こうした理解の多くは、トベルスキー（Amos Tversky）とカーネマン（Daniel Kahneman）らの業績に基づいており、彼らの実験によって人間の判断と意思決定が合理的選択理論とは異なった方法で行われていることが示された。

（12）二〇〇六年には国際認知宗教学会（The International Association for the Cognitive Science o Religion）が設立されているが、この学会では本稿で扱ったような説は、踏まえるべき当然の学説なり理論なりになっている。

（13）トマセロ（Michael Tomasello）は、模倣を『ミミック（mimic）』『エミュレーション（emulation）』『イミテーション（imitation）』の三段階に分けている。ミミックは、対象の行動の意図や目的とは無関係に、同じ動作を行うもの。エミュレーションは、対象の行動の意図や目的をまねるが、動作自体が同じかどうかは関係ない。イミテーションは、対象の意図、目的、動作と同じであるような模倣。

(14) スーザン・ブラックモア『ミーム・マシンとしての私』草思社、二〇〇〇年。

(15) こういう説明からすると、ミームの広がりにおける模倣のタイプは、エミュレーションに近いと考えられるが、実際の文化の模倣はミミック的なもの、イミテーション的なものもあるから、議論は複雑になる。

(16) Robert Boyd, Peter J. Richerson, *The Origin and Evolution of Cultures*, Oxford Univ Pr, 2005.参照。

(17) 原題は Keith E. Stanovich, The Robot's Rebellion : Finding Meaning in the Age of Darwin, University of Chicago Press, 2004.。

(18) 長谷川眞理子「進化生物学から見た宗教的概念の心的基盤」（井上順孝編『21世紀の宗教研究―脳科学・進化生物学と宗教学の接点』平凡社、二〇一四年、所収）